

## 当事業团における大腸がん検診の現状

公益財団法人鳥取県保健事業团 ○富田優子 山名庸代 富山真弓  
藤井和晃 西川清司

### はじめに

鳥取県では、検診受診率の向上を図る目的で、平成 18 年度以降全市町村にて、簡便な採便方法である、同一便より 2 個採便する一日 2 個法を実施してきた。

しかし、厚生労働省が平成 23 年度より開始する市町村への補助事業「がん検診推進事業」のうち、大腸がん無料クーポン事業については、免疫便潜血検査 2 日法のみを補助対象としたため、平成 23 年度以降の検診では、ほとんどが 2 日法へ変更した。

今回、当事業团における過去 5 年間の検診実施状況について、集計したので報告する。

### 一次検診受診状況

当事業团の大腸がん検診は、地域検診と職域検診を実施している。平成 24 年度の受診者数は、地域 20,317 人、職域 17,963 人、合計 38,280 人で、その内、大腸がん発見数は、地域 41 人、職域 11 人、合計 52 人だった。がん発見率は、地域 0.20%、職域 0.06%であった。地域検診の男女別がん発見率は、男性 0.25%、女性 0.17%であった。

地域検診は一日 2 個法から 2 日法へ変更したが、職域検診は、以前よりほとんどが 2 日法であったことから、地域検診のみで年次推移を比較した。

一日 2 個法から 2 日法へ変更したことによる受診率の低下を心配したが、平成 22 年度は県の、平成 23 年度は国と県の大腸がん無料クーポンがあったため、受診率が増加したと思われた。約 7 割の受診者が経年受診者であった。また、検体の提出率は、ほぼ横ばいであるものの、1 検体しか提

出できなかった受診者が増加した（表 1）。それに伴い、検体を遅れて提出することによる、回収、検査、結果処理が煩雑になった。

表 1 一次検診受診状況(地域検診)

	H20	H21	H22	H23	H24
鳥取県の 40 歳以上の人口	350,599	350,599	351,657	351,657	348,645
検診受診者数 (検診受診率)	18,532 (5.3%)	18,993 (5.4%)	19,188 (5.5%)	19,703 (5.6%)	20,317 (5.8%)
1 日分のみ提出 (1 検体のみ提出した割合)	62 (0.33%)	45 (0.24%)	51 (0.27%)	175 (0.89%)	224 (1.10%)
経年受診者数 (経年受診率)	13,379 (72.2%)	13,639 (71.8%)	13,821 (72.0%)	14,194 (72.0%)	14,515 (71.4%)
検体提出率	95.7%	95.9%	96.0%	96.3%	96.9%

一次検診結果の内訳をみると、平成 23 年度から、1 検体が要精検の割合が増加し、全体の要精検率が上昇している（表 2）。

表 2 一次検診結果(地域検診)

	H20	H21	H22	H23	H24
検診受診者数	18,532	18,993	19,188	19,703	20,317
要精検者数 (要精検率)	1,102 (5.9%)	1,158 (6.1%)	1,166 (6.1%)	1,293 (6.6%)	1,438 (7.1%)
1 検体が要精検 (1 検体が要精検の割合)	709 (64.3%)	764 (66.0%)	757 (64.9%)	1,024 (79.2%)	1,169 (81.3%)
2 検体が要精検 (2 検体が要精検の割合)	393 (35.7%)	394 (34.0%)	409 (35.1%)	269 (20.8%)	269 (18.7%)
経年受診者数 (経年受診者の割合)	743 (67.4%)	775 (66.9%)	789 (67.7%)	880 (68.1%)	951 (66.1%)

## 二次検診受診の状況

大腸がん検診（全体）における、要精検率、がん発見率、陽性反応適中度を、日本対がん協会の全国平均と比較したところ、差は認められなかった（表 3.4.5）。

平成 23 年度の日本対がん協会における地域・職域実績は、41 支部、2,300,539 人であった。

表 3 要精検率（全体）

	H20	H21	H22	H23
日本対がん協会	6.1	6.2	6.1	5.8
鳥取県保健事業団	5.8	5.8	5.7	5.9

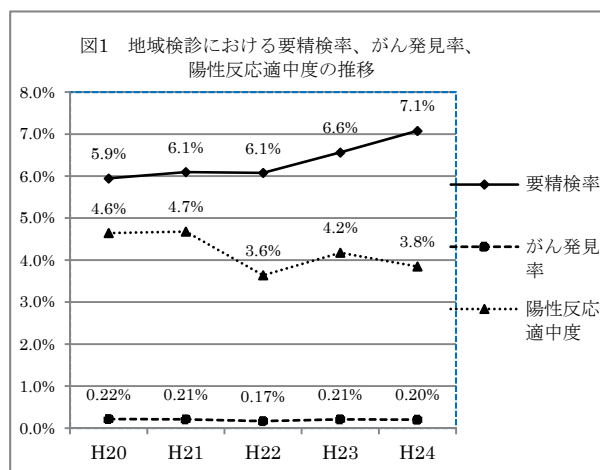
表 4 がん発見率（全体）

	H20	H21	H22	H23
日本対がん協会	0.17	0.15	0.16	0.15
鳥取県保健事業団	0.16	0.15	0.15	0.14

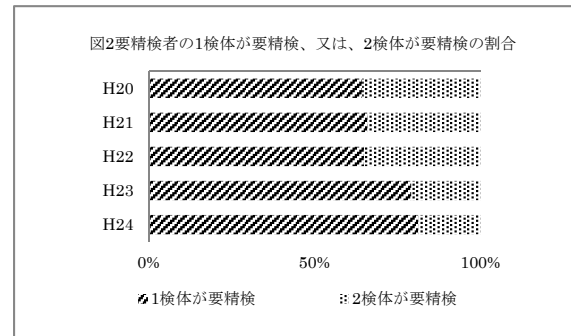
表 5 陽性反応適中度（全体）

	H20	H21	H22	H23
日本対がん協会	4.0	3.6	3.8	4.0
鳥取県保健事業団	4.3	4.3	4.2	3.7

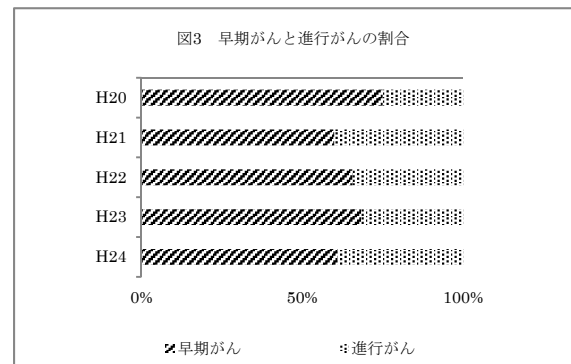
しかし、当事業団で検査した大腸がん検診の内、一日 2 個法から 2 日法へと変更した地域検診のみで比較したところ、要精検率はやや増加し、がん発見率は横ばい、陽性反応適中度は減少していた（図 1）。



また、1 検体が要精検、または、2 検体が要精検の割合を比較すると、2 日法になったことにより、1 検体のみ要精検となる比率が増加しており、出血は間欠的と考えられた（図 2）。



次に、発見がんにおける早期がんと進行がんの割合を比較してみたが、2 日法になったことによる大きな変化はなかった（図 3）。



## まとめ

鳥取県では平成 23 年度、大腸がんに係る手引きにおいて、「免疫便潜血検査を用い、2 日法または、一日 2 個法で行う」とされていたところ、「免疫便潜血検査 2 日法」へと変更した。それにより、当事業団の地域検診では、

1. 検診受診率、検体提出率、経年受診率に変化はなかった。
2. 検体を 1 検体のみ提出する受診者が増加した。
3. 要精検率が約 1% 増加した。
4. がん発見率に変化はなかった。
5. 陽性反応適中度はやや減少した。

以上、当事業団における大腸がん検診の現状を報告した。今後さらに検討をかさね、大腸がんの検診受診率及び検診精度の向上に努めていきたい。